

朝爲郎八西鎮

嘸空腹に在すならん何にか食物を差上げる程に先づへお出であれ」と自らは舜天丸の手を引き立ち給へば朝稚は胸に思ひ當たることばかりにて少しも辭退をなさず跡に付いて頓て小座敷に伴なはれました三人三ッ鼎に座りましたが再び言葉を發する由も無く暫時互ひに黙然たり舜天丸は流石に子供でございますから好き友達を得たりと云ふやうな顔をして先刻庭で拾つた所の木の實を朝稚の傍に置き並べて舜是れを喰べ玉へ」と心ばかりの饗應も流石に血統を虫が知らすか不思議なもの朝稚は夫れを手にも取上げず朝如何に婦人唯今私しが父の名前を名乗りし時抑は吾が父よと此童の仰せありしは不思議の至り父の本妻白縫姫は保元の折に太宰府にて討死し玉へりとは聞けども何となく此所は吾が父の隠れ家にて貴女は宛ら白縫姫では無きかの心持ちが致しまする若し吾が撫養に違はずばとぞ

月張弓説椿

本當の事をお明かしなすつては下さいませぬか」と座したる隙を進ますれば白縫姫形容を正し白遣は無禮なる少年かな妾は八郎御曹子には少しも縁ある者ではありませぬ去れと爲朝公とは兼て御名前を承はり其子供衆とあるからに此座敷にお招きやし聊か其孝行を慰めんと存せしばかり妾が若し御身の云ふ白縫であるなれば御身は幾口にても此家へ泊め参らせ父親を腫かして對面させ互ひに喜び玉ふ面影を見もし見られもして慾しけれと浮世の義理と云ふものは恩愛には替へられぬもの一旦遣らう貰はうと誓つた武士の其言葉は金銀よりも尙ほ堅く子が可愛いとて信義を忘れ名乗り逢ひ玉ふが如き御曹子ではありますまい御身の父上の心様は妾も人から傳へ聞いて能く存じて居る若し誠の白縫姫とやらんに逢つて父上に引合はし呉れぬとて決して御恨みなさるなよ繼母だからと云つて鬼々しく仲へ立つて親子

朝爲郎八西鎮

の對面を妨げる譯では無い良人の子なれば白縫にも親子の縁は
あるものなれば何んで等閑りに思ひませうや御身が白縫に逢ひ
玉ひなば其の白縫殿の胸の苦しきは如何ばかり此後逢つて賦の
父に逢はせぬとて恨みと思ひ玉はるな浮世の義理位い辛いもの
はあらざるものモッ何事も此世にしては短かき親子の因縁と譯
めて思ひ切つて東國に歸り養ひ親に能く仕へ其の家を相續あつ
て武士の龜鑑と成り玉はば此れに越したる孝道はありませぬ貴
郎の母の白縫殿に代つて妾が此れに越したる孝道はありませぬ貴
なよ」と背を撫すらぬばかりに傍へ寄り染々と意見をしたる
疑ふ所なし是れを賦の白縫姫……」と推察は致しました左あ
らぬ跡 朝賦に有難ふ存じます何んで貴女の御意見を悪しう私
が聞き取りませう成る程父上世に在りど雖も義を守りてお名乗

椿説弓張月

り下さる筈はなし、能く仰せ下さいました、九牛一毛此世に有り無
しを存じて歸れば是まで漸く参つた甲斐があります、密かに名乗
り玉ふども世を忍ぶ親の行術を子として他人に漏らしませう慈
悲じや情けじや知らして……」と又た耐へ難くて打ち口説ば小
兒ながらも舜天丸も傍らにあつて貰ひ泣き 舜ヤヨ母上私に此
の様なる兄上の在しませば楽しく遊び暮らさんものを何故私し
には然ふ云ふ人がありますまいか今から此子を家に止めて兄上
にして下さい、ノッ、母上」と斯ふ云はれて見ると白縫は唯泣
くばかりでございます 自、ホンに兩親の亡き後には兄弟に如
く者は無い、兄弟牆に聞げども外侮りを禦ぐとか古き唐にもある
なれば良き友達よりは悪しき兄弟の方が勝るもの、況して兄弟仲
善くて孝行深き子を持つ親に成つたなら嘸や樂しきことであら
う、夫も叶はぬ妻夫婦妻の腹より出でたるは其方一人であるなれ

ど、其方にも兄弟は四人ありけれども浮世の義理に隔てられて暗
れて對面も出来ぬ始末、飛んだ悲しきことを云ひ出し涙の種を作
りましたと云ひつゝ白縫は其場を立ちまして佛壇の中から桂
を取らだして朝稚の傍に置き 自少年能く聞玉へ、妾は唯今もい
ふ通り御身が父上のことは少しも知らず然るに此の七年以前の
こと或る夜の夢に年の頃三十に近き女子が妾の枕許に佇んで吾
れは此所に在つて人を待つ者である何所へも葬り埋むることを
なさず此所に置かし玉へと告ぐるを見て驚き覺ひれば枕許に此
の桂と觸腰がありました今に成つて思へば御身の面影其の時夢
に見たる女子にそつくりシテ見ればこそ御身の實の母にして
其子を此所に待受けたのでありませうよしや父上に逢はずとも
是れを携へて東國に歸り其の亡き跡を吊ひ玉はば心の慰めやう
もあるであらう、是れ見玉へ……」と云ひながら引き解く桂の中

には一つの觸腰がありました骨身に染みて情けの賜物、朝稚は暫
く鬼み斯ふ見いたして居りましたが頓て形見の觸腰を自分の袖
に押し藏し朝ア、有難ふ存じます……」と云はんとすれど胸
は一杯漲り落つる涙は流津瀬傍に見て居た白縫も思ひは同じ涙
に暮れた子供ながらに舜天丸も共に其場に泣き倒れた白縫は心
中に思ふやう自ア、不惑なは此の朝稚、ヨシヤ良人の心に
ども明ら様に名乗り合ひ一ト夜なりども止り置いて親子の對面
させべきかとは思ひましたか 自イヤ、夫れでは良人は
兎も角も義康殿へ義理が立たぬ兎も角も吾が良人は頓ては都に
押し上ばり平の清盛と一戦して彼れに勝つとも負けるとも生き
ては歸らぬ吾が夫婦、永く此世に居るでもなきに恩愛の爲に人
信義を欠かしては妾ばかりの罪ではない、然ふだ」と思案を
變へ又た容鉢を改りまして 自アイヤ少年主人は昨日阿蘇の社

に參詣に行きて未だに歸り玉はず家來も山田の取入れに仕がし
ければもてなししたくも心に任せず山家なれば木の實の外に食
する物とて別段なけれと粟の飯を進らせの間だ夫れにお腹を拵
へて早く出立あるやうに……」と立ち給はんと致しました時
に朝稚は其袖を扣へ「朝思召し有難ふは存じます悲しい為か
食事も致したくなくなりました母の體を今ま斯の如く賜はり
ましたは氏神の示現に少しも違ひはございませぬ父の事はモウ
思ひ講らめまして夫では是れから直ぐに下野に立ち歸ります
若し父上が幸ひにして存命へて此所へお出で遊ばすやうなこ
でも万々が一ございしましたなれば下野の國の朝稚が參つた由を
お傳ひなされて下さいましたお名残り惜きことにていふ」と泣く
遺品の桂に例の骨を包みましてイザヤとばかり立ち上がつ
た白縫姫は傍にございました手文庫の中から金の目貫一對を取

出だして自是れは主人が殊更に年來秘藏をした品ではあれど
家への土産に進上いたす下野までは道の程遠けれと神の導き玉
ふ旅路には無事に着することは確か唯だ明暮れに妾は御身の無
事を祈る云ふまではなけれども夕方には早く宿に着き夜明けぬ
内に旅を必ずし玉ふな家來が野良へ參るべき辨當あり是れを携
へ行きたらんには今日一日の餓は淺がんと云ひつゝ取つて手
渡しなし辨當腰に附けさして緩みし帯をめて遣りまして自
ず、未だ忘れたり路金は不足ではあるまいかの朝イエ路金は
養ひ親から澤山に頂いて參りました主人の秘藏し玉へる此の重
寶を賜はることも母の體に劣らず勝さず父上が遺品の心持が致
しまする左様なれば機嫌宜しう……」と懇ろに別れを告げ舜
天丸にも別れを告げ件んの鞋を背中に斜に背負つて草鞋を穿い
て立ち出づれば舜天丸は名残り惜し氣に母と共に送り出でまし

朝為郎八西鎮

て 舞何故吾が兄上には成つて下されず斯んなに直きに歸り玉
ふ今度は何時頃來玉ふか母上しはし止めてたべ 自エ、マア此
子とした事が聞き分けの無いこと此の兄イちやんはお前の兄イ
様ではありませぬ……」と賺す内笠傾けた朝稚は泣き顔見せし
と足早やに麓の方へ立去りました白縫は盡くく木影に
見へなくなるとまで見送つて跡追ふ吾が子の手を取り元の座敷に
立歸つてワツとばかりに泣き倒れました時しも次の間の襖をサ
ツと開いて立出づる人あり姫は何者ぞと見返れば是れを御曹子
為朝であります跡に續いて八丁礫の喜平次、白縫はハツと驚き下
座の方へ座しました為朝は靜かに座に着いて 爲白縫先刻吾れ
阿蘇より歸り來りて喜平次と共に朝稚の云ひたること又た御身
が云ひたることの一伍一什は立聞きした一度は彼れか純孝なる
に感激し又一度は御身が慈愛の深きに恐れ入つて居つた能くも

椿説弓張月

ア、は計らはれ呉れたるものかな然るに朝稚が宮原に於て臣梁
田の時員を撃たれ其の仇蛛手の渦丸を殺せしとの物語りに就て
思ひ出だしたる事がある彼の渦丸と云ふ曲者は先年吾れ逢日の
浦にて打漏らしたる強盗である朝稚今十三歳の小腕にして家
來の爲に其賊を殺し爰に來つて志しを述べ其勇其孝義康が子と
なすに足れり吾れ又た何にか愛ふべき……」とお喜びの躰で
ございます喜平次も白縫を慰めて朝稚を賞讃して止まず時に爲
朝公重ねて爲吾れ此山に止まりて昨日今日と思ふ内ハヤ七年
誰知るまじと思ひたるに不思議に朝稚尋ね來たりたるを見れば
世或は知らぬ者のみども云ひ難し此上は一日も猶豫すべきにわ
らねば軍兵未だ全たからずと云ひながら密かに打ち立つて戸
を都に晒らさん、疾くく船出の用意をせよ」とございまして高
間太郎夫婦以下の人々を集め右の由を仰せ渡されました皆一同

朝為郎八西鎮

喜んで一同賊に結構なる思召し一日も早く打立ち玉へ」とお
受けに及ばれました、然るに此方は朝稚でございませぬ、父の住家に
相違は無いは思ひました、明白さまに名乗り合ふことも出来
ませんで不本意ながら、麓に下つて参りますと向ふからスタス
タ／＼とやつて来る旅人が一人ある、ヒョイと見ると昨夜満丸
に殺されました、梁田の時員でございませぬからアツと驚いたが大
いに喜び、朝コレ其方は時員では無いか、時イヤ若君でござい
ましたか、足を見たが確かに二本あるから幽霊じやア無い、朝
マア其方は何うして是れに参つたか、時若君其の傍不審は、道
理定めし時員は殺されて仕舞つたものと云ふ思召しでございま
せうが斯の如く無事で居ります、朝フム一實に不思議だ、何うし
て是れに時ハイ實は昨日宮原で病氣の爲に倒れて仕舞ひ若君
は藥を乞はんと那の者の跡を追ひ玉ひましたから私は氣掛りで

椿説弓張月

数々聲を揚げましたがお歸りは無く夫れまでの所は知つて居り
ます、が跡のことは何んにも存じませぬ、夜が明けて空飛ぶ雁の聲
に眼を覺むれば病氣はモウ直つて居りまして、氣力は却つて平日
より宜しい位、殊に不思議な私、魚籠の中に這入つて居りま
した、ことで實に不思議と存じ中から飛出して、若君を尋ね奉りま
したが、トントお姿は見へ奉らず、邊りを見れば却つて藥をやらう
と云つた漁師の男が血に塗れて草の中に死んで居りました、魚
籠の細に結び付けありたる御手紙に由つて始めて私は満丸の事
を知り、然し私しは一個所の手傷も負ひませぬから、彌々不思議の
思ひをして、魚籠の中を見れば、君が大切の白幣の真中を刃を以て
刺し通したる痕がございます、借は正八幡吾が身代りに立ち玉ふ
たるか、道は勿躰なしと、獨り言を云ひながら幣と共に、残し玉へる
金子を懐中に入れて、唯今是へ差掛りました、が爰にてお目に掛る

朝爲郎八西鏡

と云ふは實に嬉しき限りでござりまする」と一伍一什の次第を
述べた朝稚件んの幣を押し返して能く見れば成る程真ん中に傷が
ある其の跡たらく不思議といふも餘りあり朝稚は幣を許さ度び
押戴き深く大神の擁護を謝して時員に仰せあるには「朝稚の
世とは云ひながら神明至誠を守る斯の如し吾れ昨夜鬼火に誘な
われて彼所の山屋敷に至り實母笹良江の鬘鬘を得たり彼の鬼火
こそ其方が亡魂の道を照らすか實は是々云々……」と白縫姫の云ひた
良江の導きでありつるか實は是々云々……」と白縫姫の云ひた
る事舜天丸の事なぞを落ちも無く物語りに及びました時員は
々々息子を漏らして時抑は疑ふ所も無き御父八郎爲朝君の
本妻白縫姫にて在すならん彼の婦人は保元の亂に父忠國と諸共
に幸府にて討たれたり世の中には噂すれと借ては巧みに此
山に入り玉ひて世の中を待ち玉ふものかシテ見れば八郎御曹子

月張弓説椿

も密かに大嶋を免れ去つて夫婦此の所に山籠りを遊ばし更に一
子を御設けに成つたものと相見へるお連れ下され今ま一度其の
所へ参つて事の眞偽を確かめはん」とあるのを朝稚はアナヤ
と押し止め朝イヤ、夫は宜しからず義理ある母の白縫姫が父
爲朝公の旨を奉けて飽まで養父に義理を立て那れまでに仰せら
れしものを今更再び戻つては父は兎も角も母に對して相濟ます
此儘足利に立歸り吾は養父に孝道を盡すの決心……時成る程
實に若君の仰せの通り夫では私しも歸めませう」と涙ながらに
二人は木原山を下だりまして翌日は豊後に出で日に歩み夜に泊
まり往くと違つて志す所が極つて居りますから往き道の半分の
日敷を立たぬ間に野州足利に立ち歸り養父義康に道すがらのこ
と及び向ふへ往つてからの始末を物語り調度と目貫とを出して
お目に掛けましたから義康是れを見そなはして感涙を押し兼ね

朝爲郎八西鎮

義其方の至孝に由つて天地神明の冥加に由りて貧母の枯骨を購
はりたるものか、寔に不思議の應報とすべし且つ此の目貫は吾
が祖父八幡太郎義家朝臣牛物と號けて秘藏し玉へる所のもので
ある嫡孫爲義是れを相傳し其の後も爲朝に授けたる由縁を傳へ
聞きたることあり思ふに爲朝大嶋の館に火を掛けて空死になし
密かに肥後の木原山に脱れ入りて白縫姫に巡り合ひ一子をさへ
設けたるものならん然りと雖も彼の人は蓋世の義士なれば子に
も人にも名乗らざるか朝稚而のあたりに父に逢はずと雖も其形
見として牛もの目貫を得寶母の白骨を携へて歸れば孝子の本
意も遂げたるも同様なり云ふ迄はなけれども此事世の中に漏ら
すべからずとありまして厚く時員を勞らひ是れには引出物と
して數多の品を賜はりまして又た笹良江の隠體は太巖山と云ふ
所の毘沙門堂に葬つて爲頼鬼夜叉の追善に至るまで佛事を懸ろ

椿説弓張月

に執り行ひましてございます去れば此の鎧返しの牛もの目貫
は永く足利の家に傳はつて後ち尊氏卿の時に二男基氏に是れを
賜はりました基氏から氏満、滿兼、持氏と管領四代に相傳はりまし
て時に應永の二十二年十一月廿四日持氏朝臣は代々の重寶鎧
返しの刀牛もの目貫を舍弟の奥州の稻村殿に是を傳はつた由
にて是れは鎌倉大草紙といふ本に出で居りますさうで是れは後
ちのお話してございます借て朝稚は十四歳にて元服に及ばれ
足利太郎義兼の名乗りました此年養父義康卒去致しましたから
家來達は集つて義兼を家督となした後ち義兼は足利の八幡宮に
神田を數多く寄附致しまして又た足利の學校に八幡宮を勧請い
たし祭祀形の法く壯嚴を加へ學校の鎮守とす右の學校といふの
は昔し小野篁が勅許を稟けて建立なされた所であります借て
も段々と年を経て學校の八幡宮は慶頼いたしたのを尊氏が再興

鎮西八郎爲朝

椿説弓張月

をなされたりさうでありまするが義兼は父の家を相續に及ばれ聞
も無く八條院の判官代といふお役に補せられ其後上野守下野守
武藏守等に任せられ左馬頭を経て終には官位従五位下に進み足
利治部大輔兼義と成つて正治元年に卒去いたされました今其後
の系圖を一寸鳥渡述べて見ますと云ふと

足利義康 朝稷の養父
足利義兼 朝稷の養父
足利義隆 朝稷の養父
足利義興 朝稷の養父
足利義家 朝稷の養父
足利義時 朝稷の養父
足利直氏 朝稷の養父

足利尊氏より後十三代は足利將軍の系譜にありませ
斯ふ云ふ有様に成つて居つて直氏の代までは東北の藩鎮として
世々崇められ尊氏卿の代に至つては諸君多承知の如く四海の權
を握つて十三代の將軍の血統と成つた世の中では賊だの何んだ
のどやしますか鬼も角も尊氏は大したものの方の英雄であつ
たには違ひ無い斯の如く朝稷の子孫が繁盛に至りましたと云ふ
のも偏に新院の御守り又た足利八幡の神助のなす所でございます
せうか是れで先づ朝稷の方のお話しは終りましたから再び八郎
爲朝公の傳記は引續き第三巻に於ては一讀を願ひます……。

鎮西八郎 椿説弓張月 鬼夜叉之巻終 郎爲朝

明治卅六年二月十四日印刷
明治卅六年二月十九日發行

(鬼夜及之卷)



編輯者

東京市日本橋區川瀨石町四番地
三井新次郎

印刷者

東京市神田區南乘物町十五番地
大場沃美

印刷所

東京市神田區南乘物町十五番地
龍雲堂

發行所

東京市日本橋區川瀨石町四番地
三新堂

松林伯知講談
俠客つばた茂兵衛

〔本美入繪口色彩極形版菊〕

末廣亭末廣講談
齋藤大助武勇の譽

〔本美入繪口色彩極形版菊〕

眞龍齋貞水講談
鎮西八郎爲朝

椿説弓張月 一 (爲朝之卷)

一月二日發行菊版形洋綴美本

椿説弓張月 二 (鬼夜叉之卷)

二月十日發行極彩色口繪入美本

椿説弓張月 三 (白縫之卷)

三月十日發行極彩色口繪入美本

椿説弓張月 四 (喜平次之卷)

四月十日發行極彩色口繪入美本

椿説弓張月 五 (隠雲之卷)

五月十日發行極彩色口繪入美本